

# 諛字の造字法

## —形態的特徴の整理と分類—

岩 下 真 央

### 1. はじめに

日本語による文字遊びの一つに「諛字」と呼ばれる遊びがある。小野（2001）によると、諛字とは「実際にはない創作漢字を、頓智のきいた面白い読みを付して読解させる遊び」であり、その歴史を辿れば江戸時代後期から見られる。

本稿では式亭三馬作の滑稽本『小野篁諛字尽』（文化3（1806）年刊）に収録された諛字189字について、構造ごとに整理と分類を行う。それにより、諛字の造字における特徴と傾向を明らかにすることが目的である。

諛字は字の形態と訓との連想によって笑いを生むという性質を持つことから、書き手と読み手のあいだにコンテキストが共有されていることが前提となる文字遊びである。諛字の調査により、江戸庶民の言語文化について新たな一面を見出したいと考えている。

### 2. 『小野篁諛字尽』と「諛字」について

諛字の代表的な資料とされる『小野篁諛字尽』（以下、『諛字尽』と表記する。）は江戸時代後期の戯作者、式亭三馬作の滑稽本である。本の内容は江戸時代の往来物『小野篁歌字尽』（以下、『歌字尽』と表記する。）および、通俗辞書『節用集』のパロディーである（鈴木（1974）、太平（1993））。諛字は『諛字尽』第14丁表から第21丁表にかけて全57項189字が収録されている。構成は『歌字尽』に倣い、各項の中央に複数の諛字を並べて、右に訓、左に歌を置く。『諛字尽』の第1項1字目は人偏に春を旁とし「うはき」と読ませる字で始まる。2字目は人偏に夏で「げんき」、3字目は人偏に秋で「ふさぎ」、4字目は人偏に冬で「いんき」、5字目は人偏に暮で「まごつき」と読ませる。

(訓) うはき げんき ふさぎ いんき まごつき

(諛字) 椿 復 楸 修 儻

(歌) 春うはき 夏はげんきで 秋ふさぎ 冬はいんきで 暮はまごつき

表題の「簔(竹冠に愚)」という字も諛字の一つであり、「簔」の字の「皇」を「愚」に変え「ばかむら」と読ませる。「簔」の初出は『諛字尽』ではなく、天明3(1783)年に刊行された恋川春町作の黄表紙『廓簔費字尽』(以下、『費字尽』と表記する。)だと考えられる。『費字尽』は『歌字尽』のパロディーとして『諛字尽』に先立ち、諛字と同様の文字遊び「費字」全17項65字が掲出されている。そのうち27字について諛字と共通する箇所があり<sup>1</sup>、三馬が『諛字尽』を著す際に『費字尽』を参考にしたと考えられる。

### 3. 先行研究

『諛字尽』の作者である式亭三馬は江戸後期の代表的な戯作者の一人であり、作品研究では『諛字尽』も含めてひとまずの成果が集積されている。しかしながら、個々の諛字については十分に調査・分析されていない状況である。高橋(1998)は『節用集』と対応させる形で『諛字尽』を紹介し、『諛字尽』に収録されている189字ほぼすべての諛字を分解し付された訓の解説を行っているが、項目の内容紹介として最小限の解説を羅列したものである。小野(2001)は文字遊びの一例として諛字を挙げ、諛字にかかわる資料を複数紹介し文学史的な位置付けを行った。しかしながら、諛字の構造について何らかの分析を加えたものではない。

乾(2017)は、諛字のような、文字あるいは絵のようなものがことばを表すとき「体系面では文字たりえないが、機能としては文字と同じ機能を持つと理解できる」(p.69)とし「文字研究の一分野として考えられなければならない」(p.76)と述べている。諛字の特徴や遊びとしての性格については更なる調査の余地がある。

### 4. 諛字の方法

#### 4.1 諛字の造字法

『諛字尽』中の諛字全57項189字を対象に、各諛字に共通する形態的特徴に基づ

1 費字と諛字で、字の構造(漢字の組み合わせ)及び訓が一致する字は全部で17字、構造のみ一致する字は4字、訓のみ一致する字は6字ある。構造と訓が一致する17字のうち「聶(かねぼ)」については、『費字尽』では草書体、『諛字尽』では行書体で書かれており、書体が異なっている。

いて (1) 漢字を組み合わせて造字する、(2) 熟字の訓を変える、(3) 既存の漢字の訓を変える、という三つの造字パターンに大別した。そこからさらに細かく分類しながら、各諺字の造字法について検討する。

(1) 漢字を組み合わせて造字する

諺字の造字法で最も多いものは、「意味を表す漢字」同士を合成させる方法である。それぞれの構成要素である偏や旁が本来持つ漢字の字義を解釈して新たに組み合わせることによって造字されており、六書における会意字のような特徴を持っている。

(a) 漢字2字から成る諺字

① 部首と会意字・形声字の合成

表1の諺字は、部首と会意字、もしくは部首と形成字との合成によって作られた諺字である。分類にあたり『康熙字典』に記載のある214部首に該当する場合のみを部首と認めた。

表1 (1) (a) ①

番号	諺字	部首	漢字	訓	番号	諺字	部首	漢字	訓
1-1	俸	人	春	うはき	1-3	俶	人	秋	ふさぎ
1-5	僦	人	暮	まごつき	2-7	鏤	金	婆	ほまち
2-9	鏤	金	娘	ふきりやう	3-10	銃	金	死	やぼてん
3-12	鉄	金	失	むすこ	3-13	鑄	金	番	おやぢ
4-16	鑿	金	貸	おほづら	5-17	錯	金	借	ちぞうぼさつ
5-18	鋌	金	返	えんま	6-20	鎰	金	爺	のばす
6-21	鎰	金	息	つかう	7-25	酒	ワ	酒	のたまく
7-26	薦	ワ	薦	かんどう	10-33	趨	走	鞞	あぶなし
11-34	罔	門	亡	たはけ	11-35	閔	門	立	こつじき
11-36	闌	門	裸	すゝみ	11-37	闌	門	構	こつきり
14-46	覘	立	見	すけん	14-47	覘	火	見	すいどうじり／やぐら
15-50	敷	女	男	きぬぎぬ	20-67	參	八	歩	まく／しんどきまかれる
22-74	焯	火	笄	かきたてる	22-76	爛	火	鍋	げびぞう
22-77	焯	火	降	ひつてん	26-90	盪	人	塩	こらしめ
28-97	鬪	酉	鍋	いりとり	33-112	魘	厂	鼈	じだんだふむ
37-120	𧈧	申	蟹	かつせん	39-128	盥	皿	眼	も、んぢい
40-131	魁	鬼	外	せつぶん	48-161	窺	穴	知	きいたふう

49-165	宀	一	穴	むじな	50-166	窠	穴	釜	やかまし
50-167	宀	穴	住	むかしむかし	51-169	絶	色	客	身のつまり
51-170	艸	色	地	つまらぬ	55-183	蠟	虫	娘	ゆだん
55-184	虫	虫	油	かすり／でんぼう					

### ② 部首と象形字の合成

表2の諺字は部首と象形字から成る諺字である。諺字に用いられている漢字が会意字・形成字もしくは象形字であるかを問う必要性は無いが、漢字の成り立ちとして異なるため便宜的に分類した。

表2 (1) (a) ②

番号	諺字	部首	漢字	訓	番号	諺字	部首	漢字	訓
1-2	夏	人	夏	げんき	1-4	冬	人	冬	いんき
2-8	母	金	母	へそくり	3-11	生	金	生	つうじん
6-22	弟	金	弟	わける	10-31	走	走	口	きつねつき
10-32	才	走	才	ですぎもの	19-64	目	目	片	がんち
22-75	爪	火	爪	しわんぼう	23-79	足	足	車	ぬざり
26-89	糸	人	糸	かるわざ	26-91	人	人	水	かはごし
26-92	人	人	人	かたぐるま	28-96	酉	酉	申	どんだん
28-98	西	西	鳥	つがひ	34-113	土	土	舟	たぬき
34-114	舟	木	舟	うさぎ	35-117	申	申	犬	なかわる
37-121	申	申	龜	りうぐう	37-122	申	申	馬	ごきとう
46-152	水	水	回	みずぐるま	46-153	目	目	回	たちぐらみ
46-154	金	金	回	くめんよし	48-160	穴	穴	無	こまち
49-163	穴	穴	目	のぞく	50-168	穴	穴	穴	のろふ
53-175	角	角	妻	やきもち	55-182	虫	虫	能	あつかは

### ③ 新しい部首と漢字1字の合成

表3、表4の諺字は①②と同様に漢字2字を合成して作られているが、表1、表2とは異なり、『康熙字典』の214部首に該当しない漢字を部首に見立てて用いている。

表3 (1) (a) ③-1 漢字2字を縦に並べる

番号	諺字	漢字	漢字	訓	番号	諺字	漢字	漢字	訓
17-54	𧯛	胸	取	うらみ	17-55	𧯛	徳	取	まぶ
17-56	𧯛	油	取	いけん	17-57	𧯛	籤	取	ぐち
18-58	𧯛	早	明	かねばこ	18-59	𧯛	早	駕	さかて
18-60	𧯛	早	惚	こけ	18-61	𧯛	早	歸	たなしゆ
20-68	𧯛	三	歩	ちうさん	20-69	𧯛	壹	歩	ぶつつけ
39-127	𧯛	皿	頭	かつぱ					

表4 (1) (a) ③-2 漢字2字を横に並べる

番号	諺字	漢字	漢字	訓	番号	諺字	漢字	漢字	訓
34-115	𧯛	苦	舟	ふなまんち う／ぼちや ぼちや	52-172	𧯛	仲	裏	こども
52-173	𧯛	紅	裏	おくづとめ ／まことに かんしん					

## (b) 漢字3字から成る諺字

## ① 既存の部首+漢字2字の合成

既存の部首と漢字2字の熟字を組み合わせで作られた諺字は、以下の通りである。

表5 (1) (b) ①

番号	諺字	漢字	熟字	訓	番号	諺字	漢字	熟字	訓
2-6	𧯛	金	遣手	ににこ	4-14	𧯛	金	子育	ふえる
6-23	𧯛	金	一家	ほしがる	7-24	𧯛	ワ	毛氈	つけのほせ
8-28	𧯛	走	昼夜	はやびきやく	9-30	𧯛	走	一人	かけおち
14-44	𧯛	見	挑灯	見たて	14-45	𧯛	見	挑灯	ぶつ、かる
19-62	𧯛	目	九十	たいふ	19-63	𧯛	目	六十	かうし
27-93	𧯛	石	三年	しんほう	40-129	𧯛	鬼	一口	あだちがはら ／くろづか
40-130	𧯛	鬼	留守	せんたく	48-162	𧯛	穴	稲荷	へそのしたや
49-164	𧯛	女	穴目	さしあひ	53-177	𧯛	角	細工	てれつく

## ② 熟語と漢字1字の合成

39、41、42、43の4例は「大門」という熟語を部首に見立てて用いている。門構えのように「門」の内部に漢字1字を入れることにより、吉原大門での行動や様子、心情を表す字を創作している。

表6 (1) (b) ②

番号	諺字	熟字	漢字	訓	番号	諺字	熟字	漢字	訓
12-39	𠂔	大門	札	きつて	13-41	𠂔	大門	入	きまぐれ
13-42	𠂔	大門	出	うしろがみ	13-43	𠂔	大門	屎	あさがえり

## ③ 既存の部首を用いない漢字3字の合成

表7の51は「𠂔」という漢字の中央にある「女」を「娘」に置き換えた形の諺字である。155は「三遍(返)回って煙草にしよう」という諺から漢字のみを抜き出して縦に並べている。174は熟語「浅黄裏」の「浅黄」を左側に縦列させ、右側に「裏」を置いている。表8の118、119、125は異なる漢字3字を上部に1字、下部に2字という三角形に配置して単字に仕立てている。

表7 (1) (b) ③-1

番号	諺字	漢字	漢字	漢字	訓	番号	諺字	漢字	漢字	漢字	訓
16-51	𠂔	男	娘	男	はりつくら/ こんくらべ	46-155	𠂔	三	返	回	たばこ
52-174	𠂔	浅	黄	裏	ゆらのすけ /やまさん						

表8 (1) (b) ③-2 漢字3字を三角形に並べる

番号	諺字	漢字	漢字	漢字	訓	番号	諺字	漢字	漢字	漢字	訓
36-118	𠂔	藤	虎	婆	とらけん	36-119	𠂔	庄	狐	狩	きつねけん
38-125	𠂔	犬	雉	申	とも						

## (c) 漢字4字から成る諺字

## ① 部首と漢字4字の合成

表9の29は走饒に「男手」「女手」という二つの語を組み合わせている。

表 9 (1) (c) ①

番号	諺字	部首	構成	訓
9-29	趨	走	男手+女手	みちゆき

## ② 四字熟語

表 10 の 66 は「五分五分」の「分」を「歩」に置き換えて、単字に纏めた諺字である。

表 10 (1) (c) ②

番号	諺字	構成	訓
20-66	躡	五分五分 (分→歩)	いひぶんなし

## (d) 同じ漢字を組み合わせる

## ① 理義字、林字様

諺字には 1 字の中で同じ漢字を反復させて意味を表したものが存在する。表 11 の 3 例は同じ漢字 2 字を横に並べて作られた諺字である。

表 11 (1) (d) ①

番号	諺字	構成	訓	番号	諺字	構成	訓
8-27	𨔵	走×2	おつて	33-111	雁	雁×2	みつち
53-176	觥	角×2	おさまらぬ/やつさもつさもめ もんちやく				

## ② 品字様、逆品字様

表 12 の 3 例は同じ漢字を 3 字並べて組み合わせた諺字である。15「よくぼる (欲張る)」は金を三つ並べることで会意的に意味を表している一方、65 三つ目の「ばけもの」は漢字の数が意味を直接的に表している。

表 12 (1) (d) ②

番号	諺字	構成	訓	番号	諺字	構成	訓
4-15	鑿	金×3	よくばる	19-65	晶	目×3	ばけもの
57-189	麤	馬×3	しきてい				

## ③ 4字以上の反復

表 13 は同じ漢字 4 字以上を反復させて作られた諺字である。84 は「手偏」と「手」を組み合わせている。126、156 は一部の要素が繰り返し符号に置き換えられている。

表 13 (1) (d) ③

番号	諺字	構成	訓	番号	諺字	構成	訓
24-82	𢶏	口×12	おしやべり／べちやくちや	24-83	𠄎	口×8	くちきゝ
24-84	𢶏	手×8	てきゝ	39-126	𠄎	皿×9	さらやしき
47-156	𠄎	権×7	よいよい	51-171	𠄎	色×9	うはきもの

## ④ 文字の一部を反復させる

「𠄎」「協」「𠄎」のように字の一部を反復させて作られた諺字は以下の 2 例あった。表 14 の 12 は「大門構え」に「女」を四つ組み合わせている。188「さんぼうこうじん（三宝荒神）」は馬の背と左右に付けた三人乗りの鞍、またはその乗り方のことを指し、「馬」の上部に「人」を品字様に並べて、人が 3 人乗っている様子を表している。

表 14 (1) (d) ④

番号	諺字	構成	訓	番号	諺字	構成	訓
12-40	𠄎	大門+女×4	まちぶせ	57-188	𠄎	馬+人×3	さんぼうこうじん

## (e) 絵的な造字方法

これまで見てきた諺字の例はいずれも既存の漢字を組み合わせることで造字されていた。ここでは既存の漢字の要素に何らかの変更を加えて作られた諺字について述べる。

## ① 漢字を左右反転させる

異なる二つの漢字を横に並べ、一方を左右反転して組み合わせた諺字は 48、49、52、99 の 4 例ある。49 は恋川春町の『費字尽』に同様の字が見られる。

70 から 73、85 の諺字は同じ漢字を 2 字並べ、左に置いた 1 字を左右反転させて向かい合わせる形である。

86、87 は「人」という字を複数組み合わせ、一部に反転した字を用いることで、人の向きや混みあう様子を絵的に表現している。

表 15 (1) (e) ①

番号	諺字	訓	番号	諺字	訓
15-48	𠂔	見たて	15-49	𠂔	ふる
16-52	𠂔	おやこ三にん	21-70	𠂔	にらみくら
21-71	林	ひやうしぎ／かちかち	21-72	𠂔	てつけ／ちうちう
21-73	𠂔	ちよんちよん	25-85	𠂔	つきあたる
25-86	𠂔	ひとごみ	25-87	𠂔	けんくは／こうろん
25-88	𠂔	ちうにん	28-99	𠂔	けあひ

## ② 漢字を転倒させる

漢字 2 字を組み合わせるとし、全体に改変を加えたものは 19 の 1 例のみである。縦に並べた「借金」という字を左に 90 度転倒させて「借金をねる(返さない)」ということばを表している。53 の「わりどこ(割り床)」は、遊郭や宿屋の一室を屏風などで仕切り数組が寝られるようにすることであり、「男女」の字の配置によって割り床の様子を表現している。

表 16 (1) (e) ②

番号	諺字	訓	番号	諺字	訓
5-19	𠂔	ねじやか	16-53	𠂔	わりどこ
23-81	𠂔	なげだし	23-81	𠂔	さかだち

## ③ 文字の大きさを変える

表 17 の諺字は、漢字全体または要素の大きさを変えることにより絵的に事物や情景を表現している。38 は「大門」に「一」という字が組み合わさり、

(84)

下部が「門」のような字になっている。「一」を大きく書くことによって吉原の大門が閉じられている様を表している。94は小さく書いた「石」を「つぶて」と読ませる。110は「雁」の左上部に置かれた「厂」が小さく書かれ、離れて飛ぶ雁を表現している。

表 17 (1) (e) ③

番号	諺字	訓	番号	諺字	訓
12-38	冨	だいじん	23-78	跣	ちんば
27-94	石	つぶて	27-95		さいのかはら
33-110	雁	かうがひ			

(f) その他

表 18 の 116 は 蛞 蝓、( 蟄 ) 蛙、蛇 の 三 者 が 牽 制 し 合 う 三 竦 み の 状 態 を 表 し て い る。字中の蛞蝓に該当する部分は「ㄗ」のような要素へ置き換えられており、これは蛞蝓の形態を表した絵である。諺字の中で要素を絵に置き換えて用いている例は、この 1 例のみである。

表 18 (1) (f)

番号	諺字	構成	構成	構成	訓
35-116		蛞蝓の象形	蟄	蛇	三すくみ

既存の漢字、もしくは漢字の一部の要素に何らかの改変を加えることによって、元の意味を備えつつ新たな意味(訓)を与えるという諺字の造字法は、遊びとして特徴的である。このような造字の方法で作られた諺字は、字の形状、大小、向きや配置が絵的に意味を表現しており、所謂文字絵のような性質を持っていると言える。

(2) 熟字の訓を変える

(a) 熟字に新たな訓・連想的訓を付ける

① 固有名詞・一般名詞の訓を変化させる

表 19 の 132、133、134 は 同 じ 項 に 収 録 さ れ て お り、す べ て 「 つ よ し ( 強 し ) 」 という訓が付けられている。強い者として「弁慶」「坂田」金時「谷風(棍之助)」が並べられており、「谷風」は江戸後期に実在した大横綱の名である。

表 19 (2) (a) ①

番号	諺字	訓	本来の訓	番号	諺字	訓	本来の訓
29-100	五大力	いつまでぐさ	ごだいき	29-101	富本	さくらさう	とみもと
30-102	花屋門	やなぎ	はなやもん	31-104	吾妻森	くすのき	あづまのもり
31-105	一里塚	えのき	いちりづか	31-106	嬉森	しいのき	うれしのもり
32-109	和中散	むめのき	わちゅうさん	41-132	弁慶	つよし	べんけい
41-133	金時	つよし	きんとき	41-134	谷風	つよし	たにかぜ
47-157	権八	さふらう	ごんぱち	47-158	権蔵	ごうり	ごんぞう
47-159	権兵	たねまき	ごんべえ	56-185	秀郷	むかで	ひでさと
56-186	梶原	げちげち	かじわら	56-187	頼光	つちぐも	よりみつ

## ② 字と訓を組み合わせる

表 20 の 103、123 は熟字と付された訓を繋げることで語が完成する。

表 20 (2) (a) ②

番号	諺字	訓	語	番号	諺字	訓	語
30-103	見返	やなぎ	見返り柳	38-123	舌切	すずめ	舌切り雀

## ③ 漢字 2 字からの連想

表 21 (2) (a) ③

番号	諺字	訓
38-124	白杵	すげだち

## (b) 漢数字に連想的訓を付ける

表 22 は、漢数字 2 字を組み合わせて作られた諺字である。140「二八」の訓「そばきり／うどん」は、そば粉 8 割、うどん粉 2 割の蕎麦のことを指す「二八蕎麦」に由来する。142「三十」と 143「四十」は「三十振袖四十島田」、145「六十」と 147「八十」は「高野六十那智八十」という諺を元に訓が付けられている。

表 22 (2) (b)

番号	諺字	訓	番号	諺字	訓
43-140	二八	そばきり／うどん	43-141	三五	でんがく
43-142	三十	ふりそで	43-143	四十	しまだ
44-144	十三	ぱつかり	44-145	六十	かうや
44-146	十六	け	44-147	八十	なち
45-148	十五	げんぶく	45-149	十九	たちまち
45-150	三十	かたまる	45-151	四十	ふんべつ

## (3) 既存の漢字の訓を変える

## (a) 新たな訓・連想的訓

107「猪」と 108「鹿」の訓は、猪肉を「ぼたん」、鹿肉を「もみじ」というところから訓が付けられている。135 から 139 は 5 字で一つの項を構成しており、付された歌には「木九からに火三つの山の哥ならばあとはいはずと五水れうあれ」とあり、これは江戸時代に実用書として広く使われていた「重宝記」などにも見られる五行説を覚えやすいように仕立てた歌「木九からに火三つの山に土一つ七つは金と五水りょうあれ（聞くからに秘密の山に土一つ七つは金と御推量あれ）」を元にしており、諺字の訓もそこから採用されている。

表 23 (3) (a)

番号	諺字	訓	本来の訓	番号	諺字	訓	本来の訓
32-107	猪	ぼたん	チョ、いのしし・い	32-108	鹿	もみじ	ロク、しか・か
42-135	木	ここのつ	ボク・モク、き	42-136	火	みつ	カ・コ、ひ・ほ
42-137	土	ひとつ	ド・ト、つち	42-138	金	ななつ	キン・コン、かね・かな
42-139	水	いつつ	スイ、みず				

## (b) 既成の漢字・訓を利用する

「巳巳巳巳 (いこみき)」は字形が似ていることから互いに似ているものを例えていう語であり、「歌字尽」にも見られる。54 項 178 から 181 はそのパロディーであり、漢字の並びを入れ替えて「巳巳巳巳 (いいきみ)」とし、「巳に巳が巳は巳となるものを巳巳巳巳せずにくらすばかもの (既におのが身は皆土となるものをいい気味せずに暮らす馬鹿者)」という歌が付されている。

表 24 (3) (b)

番号	諺字	訓	本来の訓	番号	諺字	訓	本来の訓
54-178	巳	い／すでに	イ、すでに・のみ	54-179	己	い／おのが	コ・キ、おのれ・つちのと
54-180	己	き／みは	コ・キ、おのれ・つちのと	54-181	巳	み／つち	シ、み

## 4.2 造字における傾向

諺字の造字における傾向を分析した結果、以下の特徴が現れた。

## (1) 会意性

諺字の造字法で最も多いものは、「意味を表す漢字」同士を合成させる方法である。構成要素となる漢字が本来持つ字義を解釈して組み合わせることによって造字されており、六書における会意字のような特徴を持っている。

このような会意的に造字された諺字のうち 24 例が『大漢和辞典』等の字書に掲載されていた。中国の古辞書にのみ典拠が示されている漢字や、字音だけが示されており字義が不明な漢字など、『歌字尽』が著された当時の日本で使用されていたとは考え難い漢字も含まれていることから、既存の漢字の訓を置き換えたのではな

く、諺字と同じ形の漢字が偶然に存在していたということが考えられる。

例) 第2項8字目「鋸(へそくり)」

「鋸」という諺字には「へそくり」という訓が付けられている。「金」と「母」それぞれの漢字の字義を解釈して連想的な訓が付けられており、会意的な造字法が用いられている。この諺字と同形の漢字が『大漢和辞典』に掲出されている。「けら、パウ・ボウ」と読み、良く鍛えた鉄などの意味を持つ。意味を表す「金」と音を表す「母」を組み合わせた形声字である。会意と形声という異なる造字法によって、同形の漢字が産み出されている。

表 25 字書に記載がある諺字

番号	諺字	「諺字尽」訓	「字書」読み	「字書」での意味
1-1	倅	うはき	シユウ	①富む。(正字通/説文)②あつい。(廣韻)③賸に同じ。(字彙)④喜び楽しむさま。(集韻/春秋繁露、陽尊陰卑)⑤うごめく。(白虎通、五行)
1-2	復	げんき	カ	夏に同じ。(字彙補)
1-3	愀	ふさぎ	セウ	①いつくしまない。(集韻)②うれへるさま。(篇海)③みる。とりあふ。(西廂記)
1-4	佟	いんき	トウ・ヅ	姓。(路史/燕録)
2-8	鋸	へそくり	パウ・ボウ	ひのし。(正字通/范成大)(邦)けら。よく鍛へた鐵。
3-11	銚	つうじん	サウ・シヤウ、セイ	(1)2)さび。(玉篇/集韻)
3-12	鉄	むすこ	チツ・テツ	(1)𦏧(糸偏+失)の古字。(玉篇)(2)鐵の俗字。(正字通)
3-13	鑷	おやぢ	はン・ボン	①てうな。又けづりきる。②刃のひろい斧。(集韻)③つち。又、つちうつ。(廣雅)④化学元素の名。ヴァナヂウム。Vanadiumの譯。(中華大字典)
6-21	鋇	つかう	ソク	化学元素の名。ストロンチウム。Strontiumの譯。(中華大字典)
6-22	鋇	わける	テイ・ダイ	①珠の名。(説文/集韻)②化学元素の名。アンチモニー。Antimonyの譯。(中華大字典)
10-32	尅	ですぎもの	サイ	(1)うたがひためらつて走り去る。(説文/段注)(2)①たつ。(集韻/類篇)②うたがひためらつて去る。(玉篇)

11-34	閏	たはけ	テイ・チャウ	くわんぬき。(字彙補)
11-35	閏	こつじき	テン、サン	(1)える。(玉篇)(2)立って待つ。(字彙)
11-37	闌	こつきり	トウ	義未詳。(五音篇海)
14-47	規	すいどうじり/ やぐら	レン	■(干+火+見)(十・34864)の譌字。(正字通)みる。くはしくみる。しらべる。廉に通ず。(説文/漢書)
19-62	睥	たいふ	スキ	睥の俗字。(正字通)
19-65	晶	ばけもの	バク・マク	①美しい目。(集韻)②目がくぼむ。(集韻)③四四四(記載)に同じ。(正字通)
23-78	踈	ちんば	シユク	つつしむ。(集韻)
26-92	欠	かたぐるま	ヒヨウ	氷の本字。(説文)、の原型。
34-114	枹	うさぎ	ナン	《太平御覽・敘舟下》：預章枹枕音錢，棗木。”枹”
46-152	洄	みずぐるま	クワイ・エ	(1)①さかのぼる。水流に逆つてのぼる。(説文/爾雅、釋水)②水がめぐり流れること。(華嚴經音義/後漢書)③川。(孟郊)④おろか。(爾雅、釋訓)⑤回。(枚乘)(2)水が澄む。(集韻)
46-154	錮	くめんよし	クワイ・ケ	かね。かなもの。(玉篇)
49-163	宵	のぞく	エウ、アウ、 ベン・メン	(1)(2)(3)①くぼんだ目のさま。(説文/段注)②ふかい。(集韻)③遠くのぞむ。(謝朓/注)④ふかく遠いさま。(正字通)⑤略。(4)①まがたさま(正字通)②くぼんだ目のさま(集韻)(5)なげきうらむさま。(莊子/釋文)
57-189	羸	さんば	ヒウ・ヒユ、ヘ ウ、シフ・ジフ、 キウ・ク	(1)(2)(3)①多くの馬。(説文)②多くの馬のはしるさま。(玉篇/集韻/左思)③④略。(4)衆馬のはしるさま。(集韻)

## (2) 象形性

諺字の中には、文字絵のように漢字を利用して事物の形や状態を描写したものがあつた。文字絵と異なる点は、絵を描くために用いた漢字がことばを直接的に表しているのではなく、漢字の字義をもとに連想的な訓を付けて謎解きのようにしていることである。形態を端的に表現している点が象形的であると言えるが、それに加えて、要素となる漢字の字義を失わせることなく引き継ぎ、要素の大小や方向、配置によって物の数と形態を表現している点も特徴的である。

一般に漢字を反復させて作られる理義字は、反復される字の数に関わらず事物の多さを会意的に表す。一方、諺字の場合には、字の数が事物の数と意味を端的に表

すパターンがある。表 26 の「晶 (ばけもの)」、「竈 (さんぼうこうじん)」は、要素の配置によって物の数だけではなく形態を絵的に表現している。

表 26 字数が直接的に数を表す諺字

番号	諺字	構成	訓	番号	諺字	構成	訓
19-65	晶	目×3	ばけもの	24-83	𠂔	口×8	くちきゝ
24-84	𠂔	手×8	てきゝ	39-126	𠂔	皿×9	さらやしき
47-156	𠂔	権×7	よいよい	57-188	竈	人×3+馬	さんぼうこうじん
57-189	𠂔	馬×3	しきてい				

## 5. おわりに

本稿では、『諺字尽』の諺字 189 字について、形態的特徴によって分類を試みた。その結果、諺字のうち 143 字は「意味を表す漢字」同士を合成して作られており、六書における会意的な方法に従って作られていることがわかった。ここに「漢字の字義を重視する」という日本的な漢字意識の存在が想定される。また、諺字の特徴的な造字法として「絵的な方法」が挙げられる。漢字に方向を与える、大きさを変化させるといった字体の変化や差異によって意味の表現が可能になるのは、漢字に正しい形が存在するという正字の認識や感覚を共有しているからではないかと考えられる。漢字に対する共通意識の存在が、諺字のような文字遊びが可能となる理由であるとも言える。

今後は、各諺字に付された訓や諺字の解説にあたる歌と字の構造との関係を検討し、文化的背景を含めた訓のあり方を考察していく予定である。諺字に付された歌は、当時の江戸庶民の日常に関わる幅広い事物、職業や風俗、芸能、諺や慣用句、物語や説話など多岐にわたる。諺字の全容を明らかにするためには、分野を問わない文献資料の調査および考察が必要である。また、『諺字尽』には諺字以外にも複数の文字遊びが掲載されている。それぞれの遊びとしての特徴を検討し整理することで、諺字の輪郭をより鮮明にしたいと考えている。

諺字の形態は「漢字らしさ」の問題とも密接に関係している。文字・字体研究にとって、一つの興味深い事例を提示できると考えている。

## 調査資料

1. 池田正一郎 (1984) 『江戸時代語考証事典』 新人物往来社
2. 石田博 (1975) 『故事成語ことわざ辞典』 雄山閣
3. 穎原退蔵著、尾形仿編 (2008) 『江戸時代語辞典』 角川学芸出版
4. 小川環樹・西田太一郎・赤塚忠・阿辻哲次・釜谷武志・木津祐子編 (2017) 『角川新字源 改訂新版』 角川書店
5. 大久保忠国・木下和子 (1991) 『江戸語辞典』 東京堂出版
6. 鎌田正・米山寅太郎 (2000) 『大漢和辞典補巻』 大修館書店
7. 木村義之・小出美河子 (2000) 『隠語大辞典』 皓星社
8. 小学館国語辞典編集部編 (2002) 『日本国語大辞典第二版』 小学館
9. 前田勇編 (1974) 『江戸語大辞典』 講談社
10. 諸橋轍次 (2001) 『大漢和辞典修訂第二版第六刷』 大修館書店
11. 渡部温編 (1977) 『標註訂正 康熙字典』 講談社
12. 「中國哲學書電子化計劃」 <http://ctext.org/zh> (2021年10月31日参照)

## 参考文献

1. 小野恭靖 (2010) 『ことばと文字の遊園地』 新典社
2. 笹原宏之 (2021) 「京都の「天橋立」を表す日本製漢字の展開と背景－「𨮑」「𨮒」を中心に」、加藤重広・岡墻裕剛編 『日本語文字論の挑戦 表記・文字・文献を考えるための17章』 p. 292-343、勉誠出版
3. 鈴木真喜男 (1974) 「遊び」、藝能史研究会編 『日本庶民文化史料集成 第九巻』 p411-436、三一書房
4. 小林祥次郎 (2008) 『日本のことば遊び』 勉誠出版
5. 鈴木棠三 (1981) 『ことば遊び辞典』 勉誠出版
6. 太平主人 (1993) 『小野篁諺字尽』 太平文庫
7. 高橋幹夫 (1998) 『江戸の笑う家庭学』 芙蓉書房出版
8. 棚橋正博 (1994) 『式亭三馬 江戸の戯作者』 ペリカン社
9. 吉丸雄哉 (2011) 『式亭三馬とその周辺』 新典社

## 参考論文

1. 乾善彦 (1991) 「『小野篁歌字尽』覚書」 『帝塚山学院大学研究論集』 第26集、p1-13

2. 乾善彦 (2017) 「「文字と絵」研究序説」『国文学』第 101 号、p67-77
3. 小野恭靖 (2001) 「諷字・鈍字の世界」『大阪教育大学紀要 第 I 部門』第 50 巻、第 1 号、p57-65
4. 小野恭靖 (2004) 「鈍字資料小考 (上)」『大阪教育大学紀要 第 I 部門』第 53 巻、第 1 号、p85-100
5. 小野恭靖 (2005) 「鈍字資料小考 (下)」『大阪教育大学紀要 第 I 部門』第 53 巻、第 2 号、p103-116

(いわした まお／本学大学院生)